

(1) 良き故郷「行田市」

私の地元である行田市は埼玉県の北東で栃木県に面した位置に存在し、人口 84,363 人で国宝を保有する「さきたま古墳群」や古代の蓮が存在する「古代蓮の公園」、映画の舞台となった「忍城」があることから観光地として栄えている。現在、古代蓮の公園ではイルミネーションに力を入れており、そのことにより私を含め多くの住民が地域資源の価値を見直し始めている。しかし、地域資源を活用する政策として既に「さきたま古墳群を世界遺産に登録しよう」という大きなプロジェクトが存在した。富士山や富岡製糸場が世界文化遺産に登録され注目度が一段と増加した事例を聞いたことがあるため、世界遺産登録がまちづくりの一角として機能しているかを探りたい。

(2) 世界遺産登録に向けて

さきたま古墳群は昭和 13 年に国の史跡指定を受けてから古墳の整備を続けてきた。敷地内には広大な芝生とたくさんの木々が見渡す限り広がっているため、多くの人に愛されている。私自身、幼稚園や小学校の遠足でよく訪れていた場所でもあり、多くの思い出が詰まっている。そうした市民の憩いの場として存在するさきたま古墳群に転機が訪れる。平成 16 年、上田知事の発言を境に行田市では古墳群を世界遺産に登録しようとする動きが出てきたのだ。特に活動を支援し広報する「世界遺産サポーターの会」が発足し、住民が一致団結して一つの目標に向かっていく体制がこれまで整えられてきた。登録へ向けて具体的な取り組みとしては、マスコットキャラクター 1 体 80 万円の着ぐるみの製作や直通バスの運転、シンポジウムの実施などが挙げられる。

(3) 世界遺産のメリットとデメリット

次に世界遺産登録されることでのメリットとデメリットをここで考えたい。最大のメリットとしては経済効果が挙げられる。登録されることで世界の観光パンフレットや情報誌に記載され、注目される。このことから観光入込客数が数倍に膨れ上がることは様々な事例から明白だ。急激な需要増加に対応するために、遺産付近にホテルなどの宿泊施設や土産屋の建設もあるだろう。マクロ経済の視点から見ると、雇用が生まれると同時に生産活動が円滑に行われ、それに見合った消費行動が行われることで地域単位での GDP 増加が十分に予想される。またこのサイクルが機能することで、今日とりわけ騒がれる消滅可能性都市の原因である「地元が存在する職業数減少」を解決する要素に十分になり得る。他のメリットとしては、地域住民が地元の地域資源を見つめ直す良い機会となることや膨大な観光客に対して市の政策や魅力を伝える場を作ることができる面が挙げられる。

デメリットの面では、遺産の周辺地域を含む広範囲で観光地化するため、昔の風情が失われ住民の中で対立が起きる可能性がある。観光客の中には自然を目的として訪れる

人も多いだろう。仮にそうであった場合は、立ち並ぶ宿泊施設や土産屋に幻滅することもありそうだ。そして、一般的に言われている廃棄物の増加や騒音問題も考えなければならない。

(4) 登録失敗とまちづくり

今まで住民や民間企業、行政が連携し努力してきたが平成 19 年に記載見送りとなり、登録の夢は実現しなかった。しかし、これまでの登録申請へのプロセスは無駄ではない。なぜならば地域資源を住民自らが見つめ直し、地元の魅力を再確認するという「まちづくり」の重要な基盤形成を成しているからだ。大学ではプレゼンテーションを行う授業があるが、多くの学生は話題としてよく地元の紹介を扱う。私もその一人だ。世界遺産を目標に努力していることや古墳一帯の地域が県名の発祥地という事実は魅力的であり、誇らしいことだと発表の度に感じる。そうした思い一つ一つが地元への愛着に深くかかわるのだろう。一方で「さきたま古墳群を世界遺産に登録しよう」というまちづくりは地域によって温度差が色濃く表れる。行田市を中心に位置するさきたま地区では言うまでもなく、世界遺産登録活動に積極的だ。しかし、周辺部に行くにつれてその意識は希薄化する。私が住む真名板地区は隣町と接する場所に位置している為、その傾向は顕著だ。「あの古墳を世界遺産にするとすれば、法隆寺や富士山と肩を並べることになる。他の世界遺産と同等の価値があるとは到底思えない。」と話す地元住民も少なくない。長期間に及ぶまちづくりは継続性が大きな壁として立ち塞がるが、市内の特定地域の住民だけがまちづくりへ参画している場合は極めて実現可能性が低くなる。それは住民間の意見対立がいつでも起こりやすく、また年代が異なると情熱の差によってまちづくりへの意識が低くなるからだ。多くの市民に参画してもらうため、市としては広報紙に「登録へ向けて一緒に活動しませんか。」という呼びかけや、サポーターの会もインターネットを活用し住民に呼び掛けている。他には著名な教授を招きシンポジウムを開催していたが、実際どれほどの人々がそのイベント開催を知っていたのだろうか。行政としても行政と市民、市民と市民をどのように繋げるかという方法を模索中なのだろう。

(5) まちづくりの行方

消滅可能性都市として多数の自治体が名を連ねる昨今の現状を踏まえると、世界遺産登録に名を挙げることができるということは、非常に有利な立場にあるといえる。魅力ある資源を行政、市民、民間企業は住民に関心を持ってもらうようにどのように訴えるべきかを最重要課題として設定する必要がある。都心への若者流出や、行田市が今後消滅しないためにも地元への関心を高める術を早急に考えることが必須だ。もちろん負の側面も同時に議論する必要がある。どんな時代でもそこに住む人々にとって住みやすい環境が整備されてなければならないだろう。決して、経済だけが潤えばいいわけではないのだ。